
 学 会 記 事

第22回新潟救急医学会

日 時 平成3年7月20日(土)

午後2時から

会 場 新潟大学医学部 大講堂

一 般 演 題

1) 特異な経過をとった頸部刺創の1例

金田 聡	・岩	真
大沢 義弘	・内	昌則
広田 雅行	・内	真一
内藤 万紗文	・八	実
大谷 哲士		(新潟大学小児外科)

我々は、ガラス片による前頸部刺創の処置後、2日目に嘔声の出現を認め、縦隔気腫等の所見からガラス片の残存に気づき、緊急手術を施行し、これを除去し得た1症例を経験した。症例は、8歳男児。平成2年8月4日、ガラス片の前頸部刺創を主訴に受診、この時はガラス片の除去、創縫合で帰宅した。その後、微熱、咽頭部の違和感は認めたものの、嘔声はなく、普通に生活していた。受傷後2日目に著明な嘔声が出現し、頸部及び胸部X線検査で、縦隔気腫とガラス片の残存を認め、緊急手術を施行。声帯直下のガラス片を除去した。術後経過は良好で21日目に退院となった。本症例の場合、ガラス片が血管の損傷なしに気管に達していたが、初期には周囲の変化も無く、受傷直後は症状が現れなかったが、後に喉頭浮腫を生じ嘔声を呈したと考えられた。本症例のように、処置時無症状であっても、異物の残存する場合もあり、慎重な経過観察が必要と思われる。

2) 最近当科で経験した咬傷の治療経験

高橋 秀明	・勝	政寛
山本 康行	・白	衛二
草野 望	・勝	裕 (新潟中央病院)
石川 誠一	・平	明 (整形外科)
宮島 哲		(同 形成外科)
吉津 孝衛	・牧	裕 (新潟手の外科研究所)

1986年1月から1991年6月までの5年6カ月に咬傷142例を経験した。内訳は犬咬傷105例(74%)と最も多く、猫咬傷29例(20%)、人咬傷6例(4%)などであった。

創感染が全体で20例(14%)に見られたが、動物別発

生では人咬傷3例(50.0%)、猫咬傷9例(31.0%)と高く、犬咬傷は9例(6%)と低かった。犬咬傷105例のうち11例(10.5%)に腱、神経損傷などの主要組織損傷が見られた。刺創型咬傷で、化膿性関節炎による関節破壊3例と骨髓炎による指切断の1例が見られた。

化膿性関節炎や骨髓炎が疑われる場合直ちに関節切開や十分な洗浄、病巣搔爬排膿等早期の外科的処置が後遺症を最小限に留める意味から重要である。

3) 心室中隔穿孔を来した急性心筋梗塞症にIABPと血液透析を併用しショック状態を離脱し、手術を施行した1例

鷺塚 隆	・古	邦夫 (新潟県立中央病院)
高野 諭		(循環器内科)
丸山雄一郎		(同 内科)
春谷 重孝		(立川総合病院)
		(胸部外科)

我々は発症早期より cardiogenic shock と腎不全をともない内科的治療により急性期を離脱し、発症13日目に手術を施行した一例を経験したので報告する。

症例は65才女性で既往歴として昭和55年よりインスリン非依存性糖尿病、腎症、網膜症を併発。5月5日頃より労作時の前胸部不快感出現。5月8日当院内科外来受診し診察待機中に、前胸部痛増強持続し急性前壁中隔心筋梗塞にて当科入院。入院時、ショック状態で胸骨左縁に汎収縮期雑音が聴取され血液ガス所見にて肺動脈にて有意な酸素飽和度の上昇を認め、心筋梗塞後心室中隔穿孔と診断。本例は糖尿病性腎症があり入院時腎不全ももっており入院同日よりIABP、翌日より血液透析併用し急性期を離脱し準待期的手術に持ち込むことができた。今後、糖尿病合併例の増加が予想され、手術時期の決定に際し本症のような発症早期より多臓器不全を合併する様な例に対してより慎重な判断が要求されると考えられた。

4) 精神的危機状況となったICU入室患者の心理

—Aguilera と Messick の問題解決モデルによる分析—

保莉 幸(新潟市民病院救命救急センター)
意識消失した患者が、覚醒後危機状況に陥った事例を看護記録と患者との面接から、Aguilera と Messick の問題解決モデルを参考に、危機へのプロセスを分析した。